HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チャシ即ち蝦夷の砦
Author(s)	河野, 常吉
Citation	札幌博物学会会報, 1(1), 73-90
Issue Date	1906-06-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60755
Type	journal article
File Information	Vo.1No.1_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

チャシ即ち蝦夷の砦

河野常吉

（第二圖版）

CHASHI OR FORTRESSES OF THE AINU.

BY

T. KŌNO.

(With Plate II.)

北海道に於ける人類學上の遺跡中、顯著なるものを、竪穴及びチャシとなす。而して竪穴に就ては、從來研究したる人、記述したる書類少なからざれとも、チャシに就ては**松浦竹四郎**氏の東蝦夷日誌、其他同氏の日誌類、**永田正方**氏の北海道蝦夷語地名解、其外數種の書籍中に僅に散見するに過ぎず。而も其記述甚だ簡略にして、チャシなる者の形狀性質を知るに足らず。彼の**坪井**博士の如きも、亦チャシに就ては多く說く所なし。蓋しチャシは舊來、多くアイヌの地名によりて、知られたるものにして、實際之を調査したる人稀なるのみならず、廣く亘りて調査したる人なければ、未だ完全に研究せられずと云ふも可なり。是れ予が玆に予の研究せる大略を述べんと欲する所以なり。

チャシの定義

チャシは、蝦夷語即ちアイヌ語にして、一地域に人の容易に入る能はざるやう、四方を圍ひたるを云ふ。**ジョン、バチェラー**氏のア

[Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., Vol. I. 1905.]

イヌ英和辭典には、圍、塀、城と譯せり。故にアイヌは濠、壘、崖等を以て圍ゐたる砦の如きものをもチャシと云へば、又土壘、木柵等を以て圍ゐたる牧場の如きものをもチャシと稱するなり。而して北海道の人類學的遺跡として、此處に謂ふ所のチャシは、古昔の砦(又城、塞、館、堡、壘等と譯す)にして、今日普通チャシコツ(砦趾)と稱するものなり。又其大小其他狀況によりて、ポロチャシ(大砦)、ポンチャシ(小砦)、キムンチャシ(山砦)、ウェンチャシ(惡砦)、ライチャシ(廢砦)、ウフイチャシ(燒砦)等の名を以て呼ばるるものあり。但しカムイチャシ(神砦)と稱するものの如きは、概ね一種の迷信より、命名せるものなれば、其人の遺跡なる證あるものの外は、此處に謂ふ所のチャシの內には、加へざるものとす。

チャシの分布

チャシは、北海道本地(千島を除きたる北海道)を中心として、南は奥羽地方の北部、北は千島列島の大部分に存在す。

陸奥國のチャシに就ては、明治二十年東京人類學會報告第十二號に、**佐藤蕾**氏の北津輕郡高野村に於ける狄館(イヌタテ)の記事あり。又明治二十三年同學會雜誌第五十一號に、**佐藤重紀**氏の上北郡竪穴の記事中、同郡蛯澤、及び中志の堡の事を載せたり、今之を摘錄すれば下の如し。

北津輕郡高野村狄館(佐藤蕾氏)。弘前の東北凡そ五里、小高き丘にあり。內外兩廓あり、各々虛堀を圍らし、外　は縱橫各々二町餘、內廓は一町餘なり。土器凡そ百片、雷斧二個を拾へり。

上北郡蛯澤村に在るもの(佐藤重紀氏)。高さ五六間の丘岬にあり。丘上東西三十間、南北二十間許、不現則なる弧三角形をなし、一方は堀を以て限り、三方は溪澤に臨み、其中腰に當りて一帶の階段幅五六尺のものを折回し、兩端共に堀に合す、宛然小堡なり。堡內竪穴の數二十二個ありて、大なる穴中央に位す、又附近にも竪穴あり、砦內發掘の暇なかりしが、粗末なる貝塚土器の破片二三個を拾ひ得たり。

上北郡中志蝦夷館(佐藤重紀氏)。丘陵の鼻端高さ二十丈許、丘上堀を一方に堀り一區を劃すること蛯澤に同し、唯中腰に段を設けざる差あるのみ。堡內東西二十五間、南北十四間、穴の數五、貝塚土器の小破片あり。

此地方俚俗蝦夷館、又は館址と稱する處、諸處にあり。皆丘上に沿ふて一區を搆へ、堀を廻らし段を設く、其内容は、蛯澤、中志の遺跡の如くにて、唯異なるは竪穴の有無のみ。

蓋し兩氏は、北海道に於けるチャシなるものを知らず、單に其地方に於ける遺跡を、報したるに過ぎずと雖も、其記事によりて觀れば、其遺跡は、北海道のチャシと全く同一にして、陸奥地方には其遺跡少なからざるを知るべし。羽後國にも之に似寄りたる遺跡ありとの談話を、聞きたることあるも詳かならず、奥羽地方は尚一段の調査を要すべきものとす。

北海道本地には、チャシの數甚だ多し。今其地名に存する所のもの、並に地名に存せざるも、明にチャシと認むべきものを下に擧げん。但し引用書籍は之を記するも、同一のチャシにして數種の書籍に載するものは、煩を厭ふて其著述年月の古きもののみを記するに止む。又書籍に見えずして談話に聞きたるものは談話者の氏名を記し、書籍にも見えず談話にも聞きたることなくして、予の見出したるものは予の名を記す。

渡島國

函館區函館山の蝦夷館(舊圖)。北海道蝦夷語地名解(以後單に蝦夷語地名解と記す)にはチャシコツと記す。其形今滅して存在せず。

檜山郡江差町蝦夷館(再航蝦夷日記)。同日記に曰く、此處土居礎今に嚴然たり。以前は夷人の首長住せし由申傳へり。古器並に矢根石、雷斧石、霹靂砧等を掘得ること多しと。蝦夷語地名解にはチャシコツと記す。町の北部にあり。

後志國

奥尻郡赤石村チャシ(再航蝦夷日誌)。蝦夷語地名解には、往時アイヌの砦なりしが、寶德三年武田信廣此處に渡海し、暫時居住せりと云ふよしを記す。

瀬棚郡利別村利別川左岸(東蝦夷日誌)。同日誌に曰く、チャシウンナイ、此處城跡あり。是は太古神か築きし由にて、跡より土器の破れ、勾玉、瑪瑙の鏃石等出るなりと、其遺物より察すれば人の造りしものならん。

嶋牧郡江泥邊村チャシ(蝦夷語地名解)。

岩内郡堀株村チャシコツ(西蝦夷日誌)。

積丹郡余別村チャシコツ(同上)。

余市郡余市町余市川左岸(河野常吉)。今墾して畑となるも濠及び中段等の形を存す。津輕一統志に、興市狄乙名チフラケ八右衞門、家四十軒、居城ありと云ふもの、是れ歟。

石狩國

樽戸郡新十津川村トック川筋チャシコツ(蝦夷語地名解)。

雨龍郡深川村納内石狩川右岸(小林運平氏)。砦の内外に竪穴あり石器、貝塚土器片等多し。

上川郡神居村石狩川左側チャシコツ(蝦夷語地名解)。神居古潭隘峽の入口の處にあり。

上川郡鷹栖村石狩川右側チャシコツ(同上)。此砦は前記の砦と石狩川を隔て相對す。

上川郡忠別川右岸チャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。

膽振國

虻田郡禮文華村海岸(東蝦夷日誌)。同日誌に曰く、チャシナイ(砦川の義)、上に昔の酋長の城と云ふものあり。近頃迄岩にて疊上げたる井戸もありしが、今埋れてなし。三面は絕壁になりて、一方山根に續き、頗る要害の地なりと。北海道廳實測圖には、此處の地名をチャスと記す。

虻田郡辨邊村チャシ(同上)。

虻田郡辨邊村虻田村境チャシナイ川の傍(同上)。虻田舊土人曰く、往古アイヌの城跡なりと。

有珠郡有珠村ポンチャシコツ(虻田舊土人明石和歌助)。

有珠郡有珠村ポロチャシコツ(同上)。有珠舊土人某曰く、祖先の造りしものなりと。

有珠郡伊達村西紋鷲タテ山(河野常吉)。今社地となるも、規模の大なる砦跡依然たり。

室蘭郡室蘭町北岸シットク岬の西方にある小岬(同上)。繪鞆の舊土人オピシテクル曰く、室蘭にある三個のチャシは、アイヌの祖先の造りたるものなりと。

室蘭郡室蘭町北岸市街の東方チャシコツ(蝦夷語地名解)。同書に曰く、土人云ふ、昔ホッケ魚の骨を用ひて槍となし、此砦に據りて防戰したりと。

室蘭郡室蘭町北岸ウェンチャシ(同上)。

白老郡白老村チャシコツ(同上)。

勇拂郡厚眞村ライチャシ(東蝦夷日誌)。

勇拂郡鵡川筋似湾と累標の間カムイチャシ(同上)。雷斧、石鏃等を出

す由なれば、人造のチャシならん。

千歳郡長都村カマカ(野村恭三郎氏)。砦内開墾して畑となるも、周圍の濠は依然たり、千歳の舊土人(婦人)云ふ、コロポックルの遺跡なりと。

千歳郡蘭越村ペサのチャシコツ(夕張日誌)。同書に曰く、シコツ(千歳の舊稱)の總大將の館なりと。

千歳郡烏柵舞村モペツ川筋チャシコツ(蝦夷語地名解)。モペツ川と千歳川の間の小丘にして、人作にあらずと記す、砦趾なるや否やを知らず。

日高國

沙流郡佐瑠太村海岸ウェンチャシ(東夷竊々夜話)。

沙流郡平賀村チャシコツ(東蝦夷日誌)。オキクルミ(古英雄の名)の城跡なりと云ふ、石鏃等を出す。

沙流郡貫氣別村ヌカヒラ川南岸ウムンチャシ(東西蝦夷山川地理取調圖)。ウムンチャシとは後の砦の義なり。

沙流郡貫氣別村ヌカヒラ川南岸チャシコツ(同上)。

沙流郡門別村門別川筋チャシ(東蝦夷日誌)。

新冠郡高江村新冠川口西岸判官館(同上)。判官館とは、源義經をオキクルミの事跡に附會して、和人の呼べるものなり。北海道廳實測圖にはチャシコツと記す。

靜內郡下下方村染退川東岸チャシコツ(同上)。同書に此處シャグシャイン(寛文九年叛亂せし酋長)の居城なりしかと記す。

靜內郡椛別村椛別市街の裏山(河野常吉)。

靜內郡椛別川の東方(同上)。此砦は前記の砦の北方に在り、アザミ川を隔てて相對す。

三石郡姨布村姨布市街の裏山(同上)。

三石郡姨布村シヨツプ(東蝦夷日誌)。同書に曰く、三日月形の土手三つあり、其外に堀跡あり。內に穴居跡十八九並ぶ、雷斧、環槌、鏃石、陶器の欠け多し。其邊一面に畑跡なりと。

三石郡幌毛村チャシコツ(同上)。同書に曰く、陶器片、鏃石多し、穴居跡ありと(穴居跡は砦內か砦外か詳かならず)。

三石郡鳧舞川口の丘陵(寛政三年蝦夷道中記)。蝦夷人の館を搆へし跡ありと記す。未曾有之記には城跡とあり。

浦河郡井寒臺村チャシコツ(東夷竊々夜話)。

浦河郡西舍村幌別川筋キムンチャシ(東蝦夷日誌)。キムンチャシは山城の義なり。

浦河郡西舍村幌別川筋ウフイチャシ(同上)。寛文亂に燒打ちになりし跡なりと記す、如何にや。ウフイは燒る義なり。之と同し地名は膽振國千歳川筋にもあり。

十勝國

當縁郡大樹村歷舟川上流チャシコツ(東蝦夷日誌)。同書に云ふ、方一町に二町許の土手、昔此邊の酋長が住せし處と云傳ふと。

當縁郡當縁村チオプシ沼の西(同上)。同書に曰く、大なる土手の如き物あり、昔判官樣(オキクルミ)の船が化して此の如く成りしと、其上に繩を卷立しと云ふ、小山の如き物二つあり、案するに是往古の土壘跡か。其邊穴居跡ありて土器、又雷斧、鏃石等を時々掘出せりと。

中川郡旅來村(河野常吉)。大津より帶廣に赴く途上、左方の丘陵に之を望む、砦內竪穴あり。往昔アイヌの酋長の居城にして、諸方の敵と兵を擐へたりと言傳ふ。

中川郡安骨村(十勝日誌)。石器等出つと云ふ、村名は砦趾あるによりて命す。

中川郡利別川筋ポンチャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。

中川郡幕別村猿別市街の西の高丘(河野常吉)。市街地より之を望めば、丘頂更に瘤の如く突起するを見る。今神社を置く、砦形依然として存す。

河東郡音更村オトプケ川右岸チャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。

河西郡芽室村芽室太チャシコツ(東蝦夷日誌)。石器を出す。

上川郡屈足村十勝川沿岸チャシコツ(十勝日誌)。同書に方百餘間と記す。

釧路國

足寄郡淺別村關牧場內(農學士關又一氏)。

白糠郡尺別村直別川支流アイタイペ(中村守重氏)。二個の砦趾ありと、又其邊竪穴多しと云ふ。

白糠郡尺別村東部チャシコツ(蝦夷語地名解)。

白糠郡白糠市街東部の裏(河野常吉)。白糠驛遞の裏手に當る丘岬に在りて、空濠あり、竪穴あり。

釧路郡釧路町舊會所裏チャシコツ(東蝦夷日誌)。當地乙名の先祖、オニトムシの住せし處なりと言傳ふ。今其形を存せず、一方切崩せり。

釧路郡釧路町モシリヤのチャシコツ(東蝦夷夜話)。久摺日誌にはポロチャシコツと記す。當地乙名の先祖、オニトムシの城跡なりと云ふ。東蝦夷夜話には、麓に二重の濠を繞らせるよしを記せども、今見えず(此チャシは圖に示せり參照すべし)。

釧路郡釧路町ハルトリ沼の西岸チャシコツ(東蝦夷日誌)。同書によればオニトムシの子、トミカラアイノ、此城を築き居住せしが、根室、厚岸、十勝三方より攻來り落城に及ぶと。

釧路郡釧路町カツラコイ(釧路郡役所某氏)。

釧路郡昆布森村マチョロベツの西チャシコツ(東蝦夷日誌)。

川上郡釧路川東岸フシコケウニチャシコツ(久摺日誌)。同書に云ふ、此處一の城跡あり、穴居跡多しと。

川上郡虹別村西別川筋ポンチャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。

厚岸郡眞龍村厚岸湖北西岸チャシコツ(東蝦夷日誌)。

厚岸郡厚岸町オソナイ山(河野常吉)。開墾して畑となるも、尚ほ濠形を存す。

厚岸郡未廣村マピロ海岸の丘岬(同上)。稍々離れて十餘の竪穴あり。

厚岸郡後靜村アチャヒラのチャシコツ(納紗布日誌)。稍々離れて一群の竪穴あり。

厚岸郡後靜村ウライコタン(河野常吉)。道路の傍の丘上にあり、砦の内外に竪穴あり。

根室國

花咲郡沖根邊村シケウシ(納紗布日誌)。同書に曰く土壘跡ありて陶器、又矢根石を出すと。

花咲郡婦羅理村チャシコツ(同上)。此砦より少し登りて、岬頭にチャコツ(別地の義)あり、是れ亦砦趾を存す。

花咲郡琶瑤瑁村チンネモトのチャシコツ(同上)。

花咲郡琶瑤瑁村ウェンチャシ(同上)。同書に曰く、惡しき城と云へり、此方の大將負けて逃去りしより號しと。

花咲郡琶瑤瑁村トウサッポロの西チャシコツ(同上)。

花咲郡琶瑤瑁村チニオプの西チャシコツ(同上)。此處種々の土器出つと。

根室郡根室村の東部チャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。

野付郡別海村西別川筋チャシコツ(同上)。

野付郡茶志骨村チャシコツ。砦趾あるにより村名を附す。

目梨郡忠類村忠類川筋チャシコツ(蝦夷語地名解)。

北見國

斜里郡遠音別村チャシコツ(蝦夷語地名解)。

網走郡美幌村ピポロ川東岸ウェンチャシ(東西蝦夷山川地理取調圖)。

網走郡達媚村チャシコツ(同上)。

網走郡�algo木禽村チャシコツ(同上)。久摺日誌に曰く、三町許の土手、恰も城廓の如し。是を問ふにトウジンカムイ(唐人神)の城跡なりと云ふ。又其邊に一丈五六尺位つつの穴多し、コロコクンクルの家跡なりと。

常呂郡鑿沸村サロマ川の西岸チャシコツ(蝦夷語地名解)。

紋別郡湧別村湧別川筋エウケチャシコツ(同上)。傾ある砦の義なり。
紋別郡渚滑村渚滑川左岸チャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。
紋別郡藻鼈村モベツ川口の西方チウェンチャシ(同上)。
宗谷郡稚内村チャシコツ(蝦夷語地名解)。

天　鹽　國

留萌郡留萌村留萌原野の傍ポンチャシコツ(西蝦夷日誌)。
中川郡下名寄村天鹽川右岸チャシコツ(東西蝦夷山川地理取調圖)。同圖並に北海道廳實測圖共にチャシコツナイと記す。

以上北海道本地に在るチャシの數、總計九十、其内予の見ざるもの過半を占むるを以て、或は實際チャシならざるものを含むやも知るべからず。又此他にチャシなるべしと思はるる個處なきにあらざれども、誤謬を傳へんことを恐れて暫く之を略す。尚ほ精細に調査せば、チャシの數は必ず大に增加するならんと信ず。

千島列島中、南部の島には、チャシに關する數箇の地名あることは、舊記によりて之を知りたるが、尚ほ予は明治三十三年、武藏艦に便乘して、千島狀況調査のため巡回したる節、擇捉島に於て新に三個のチャシを發見し、又同時同伴したる色丹アイヌ(北千島より轉住せる者)酋長ヤーコフ等に質問して、北部シャシコタン島に至る間の島嶼中にも、チャシの存在するを知れり。千島國中チャシと思はるる處下の如し。

色丹郡色丹島(色丹土人酋長ヤーコフ)。アナマ、トカリモイ、マスバの三ケ　に在り、何れも空濠を存すと云ふ。
國後郡國後嶋東沸村チャシコツ(東夷竊々夜話)。
國後郡國後嶋留夜別村ウェンチャシュー(三航蝦夷日記)。同書に曰く、城跡惡しきと云ふことかと。
國後郡國後嶋米戸賀村カムイチセ(同上)。同書に曰く、神の城跡と云ふなり、少しの土居殘りて今に在り。何人の築きしものなるやと、カムイチセは神の家の義なるも人造なるべしと察せらる、此外同村にはムシチャシと云ふ地名あり。
國後郡國後嶋大瀧村チャシコツ(蝦夷志拾遺)。三航蝦夷日記によれば、此外同村にはチャシウシと云ふ地名あり。
擇捉郡擇捉嶋内保村内保川右岸(河野常吉)。丘陵に在りて空濠を存

す、内保の部落より之を望むべし。

紗那郡擇捉嶋單冠灣岸年崩驛遞の傍(同上)。小砂丘の周圍に空濠の跡を存す。附近に竪穴あり。

紗那郡紗那村紗那市街紗那支廳の裏(同上)。低き丘上にあり。稍々其形を損したるも、尚ほ明に砦形を見る。

新知郡ウシシリ嶋(色丹土人酋長ヤーコフ)。以下四ヶ處皆空濠の跡を存すと云ふ。

新知郡ラショワ嶋チャシコツ(同上)。此處チャシコツを以て地名とす。

占守郡シャシコタン嶋(同上)。

占守郡オンネコタン嶋(同上)。

幌莚、占守の二島には數處上陸せるも、予はチャシの遺跡を見ざりき。ヤーコフ等に質問するも、古戰場の跡はあれども、チャシはオンネコタン島を限りとし、其以北の諸島には絶えて之なしと云へり。但し幌莚島の南部、ペットポ沼とシーペットポ沼との間に、チルラトイなるものあり。チルラは運ぶ義、トイは土の義にて、卑濕の地に土を運び、長約三町、幅約二町、高約一丈程に築きたるものなり。比較的大工事にして、要害のため築きたるかと思はるれども、此處には暫くチャシの内に算入せず。

樺太島には、其南西岸、ノトロ岬と白主との間、グイと云へる地の山の裾に、トイチャシ(又はチャシ)と稱するものあり。土砦と云ふ義にして、方形をなし。其幅五六十間、三面に堤を築き、堤下に空濠を穿つ。砦内を掘るときは種々の土器出づると云ふ。而して砦の來歷に就ては、蝦夷草紙後篇には、蝦夷の申傳へは往古日本の軍勢籠城したる跡なりと云ふと記し、北夷談には、老夷に尋ぬるも何者の造りたるやを知る者なし、一老夷は昔胡人の作る所と言傳ふと云ふよしを記し、北蝦夷圖說には、何者の造る所にや知るべからずと記し、再航蝦夷日誌には、小人島の城跡なりと云へりと記せり。然れども此砦は、北海道に普通存在する所のチャシと稍々異る點なきにあらず。假令同種類のものとするも、同島には此他に絶えてチャシあることを聞かざれば、此處には樺太島を、チャシ分布區

域以外に置き、更に他日の調査を待つこととすべし。

チャシの位置及び大さ

チャシは如何なる地に設くるや、之を細説すれば多様に渉ると雖も、之を概括すれば、普通海又は湖沼、又は河川に近き丘岬、若くは丘陵の頂にして、其附近に於て魚介其他食料を採るに都合よく、又淡水ありて飲料を汲むを得べく、又形勝要害にして、且つ土地乾燥、衛生に適する處とす。

此處に丘岬と云ふは、其形必ずしも一定せるにあらず、多くは丘陵の横に細長く斗出したる處なれども、又些少の斗出に止まる處あり、平坦なる高臺地の一端なるあり、稀れに山腹の傾斜緩かにして少しく斗出したる處あり。又此處に丘頂と云ふは、多くは凸起せる丘陵の頂なれども、亦或は横に連延せる丘頂中更に瘤の如く凸起せる處あり、或は平野中纔に高き小地積の臺地あり、或は海岸の一小砂丘に過ぎざるものあり。而して圖に示したる、釧路國釧路町モシリヤのチャシの如きは、丘陵の一端に於て一段高き處にありて、丘岬と丘頂とを併せたる地勢を有するものとす。

備考。樺太島クイにあるトイチャシは、丘陵に據らずして、丘陵の麓なる平地に設けたり、是れ實に異例たり。然れども北海道のチャシ中、予の見ざるものの内には、或は之に似て丘岬若くは丘陵に據らずして、平低地に平地と同し高さ、又は平地より稍々低く、設けたるものあるやも知るへからず。尚ほ調査を要す。

チャシ所在地の高さは、其丘陵の麓なる平低地より、又海岸に在るものは海面より、直立二三十尺乃至七八十尺を普通とす、稀に甚だ低きものあり。膽振國千歳郡長都村カマカに在るものの如きは、平地に濠を繞らし、砦内の高さ僅に四五尺に過ぎず。又間々百尺以上の高地に在るものあり。日高國三石郡姨布村姨布市街の裏山、十勝國中川郡猿別市街の西山、釧路國厚岸郡オソナイ山に在る者の如きは、直立概算二百尺内外あるべしと思はる。要するに餘り低きものは要害ならず、高きに過るものは、日常の食糧、飲水を採るにも概ね不便なれば、多くは斯の如き處に設けざりしならん。

チャシの大さは甚だ一定せす。其周圍二三十間より約百間に至るも、概して小形のもの多し、又稀れに大なるものあり、其例を擧くれは、膽振國伊達村タテ山の丘岬に在るものは、其形略ほ三角形をなし、東西約三十間、南北約三十五間、尚ほ其一方を仕切りたる二重濠の幅合せ八九間あり。其他前に記せる、陸奥國北津輕郡高野村、北見國網走村翻木禽村に在るものの如きは、予は之を見さるも、書籍に記する所によれは、頗る大なるものなり。

チャシの形狀及び構造

チャシの平面に於ける形狀は、概ね不規則なる楕圓形、其他不規則なる圓形なれども、又弧線、直線より成れる、不規則の三角形、又は方形に屬するもの等あり。盖し築造者の見込と、天然の地勢とに依り、種々の形狀をなすは當然の事ならん。其構造も亦各皆多少異なる所あり。今便宜のため丘岬に在るものと、丘頂に在るものとの、二種に分ちて說明せん。

チャシの丘岬にあるものは、其丘陵に續ける方に、必ず弧線若くは直線の空濠を、掘り廻して之を仕切り、其掘りたる土は、チャシの方に盛り上げて土手を作り、或は外部に盛り上げたるものあり、或は土手を造らずして、其土を他の修築等に用ひしかと、思はるるものあり。濠の深さは現狀に於て、大抵三尺乃至十二尺、幅は上部に於て六尺乃至十八尺位とす、之より大なるものは稀なり。濠は普通一重なれども、又二重に設けたるものなきにあらず。又丘岬の細長く斗出したる者に在りては、前後二ヶ所に空濠を掘りたるものあるは間々見る所なり。チャシの丘岬に續かざる方は、斷崖の場合には其儘になし置き、其他は自然の傾斜に任するものと、段階を設けたるものとの二樣あり。段階の作り方は、丘頂に近き處、又は半腹邊に、帶を廻らしたるが如く、段階を繞らし、其兩端を空濠の兩端に連接せしむ。稀に一方にのみ段階を設けたるものあり、構造の精粗一樣ならず。

丘頂にあるチャシは、丘の周圍に空濠を繞らし、濠より掘り取りたる土は、之を外側に盛り上げ、或は外側に出さずして、砦内の修築等に用ひたるかと、思はるるものあり。稀に小丘の周圍に幅狭き平地を繞らし、更に其外部に濠を繞らし、砦形恰も縁ある帽子に似たるものあり。又丘頂更に瘤の如く突起せるチャシに在りて、幾部分天然の丘の傾斜を以て要害となし得るものは、其部分は其儘になし置き、他の丘頂の平坦部に續く方にのみ濠を掘りたるものあり。又チャシにして全く濠を設けず、唯丘側を切り下げて要害となしたるものあり、稀れには其人工の極めて粗漏にして、一見したる所にては、殆んど人工を加へざるかの如く疑はるるものあり。

チャシの内部は、或は天然の地勢に任せ、或は少しく手入れをなし、或は丁寧に手入れをなせり、從て緩かなる傾斜をなすものあり、平坦なるものあり。一部分平坦にして一部分緩斜せるものあり、又砦外までも手入れして立派に造りたるものあり、而して茲に最も注意すべきは、砦内に間々竪穴を存するものあること是なり。此事實は頗る研究すべき價値あるを以て尚ほ後に說く所あるべし。

チャシ内の遺物

チャシ内の遺物に就ては、**松浦竹四郎**氏の日誌中に、雷斧、石鏃、土器片等を出したる數處の事を記し、又**佐藤蔀**氏、**佐藤重紀**氏の記事中にも、陸奥國の砦趾より石器、土器片を出せる事を記し、其他チャシ内より是等の遺物を得たることは、間々聞く所なり。尚ほ予が親しく調査したる數例を述べんに、後志國余市町のチャシに於ては、雷斧、石鏃、石匙、骨槍、鐵鉤、煉玉、貝塚土器片、魚骨、獸骨、貝殻、木炭等を拾ひ、殊にチャシの一側面にある貝塚に於て多く之を得たり。又釧路國釧路町モシリヤのチャシに於ては、石鏃、貝塚土器片、鐵釘(船釘)を採集し、同町舊會所裏のチャシの切崩したる處に於ては、石槍、骨槍、鐵の附きたる骨器、貝塚土器片、魚骨、獸骨、貝殻等を得たり。又釧路國厚岸郡未廣村のチャシに於ては鐵刀、

鐵鈎(船釘を曲けしもの)貝殻、魚骨、獸骨、鹿角、木炭等を採集したるも、石器及び貝塚土器の類を見ず。其附近にある竪穴の一を堀りたるも、亦鐵片、燒石を得たるに過ぎざりき、又同郡厚岸町オソナイ山のチャシに於ては、少許の牡蠣殻の外、一も得る所なかりき。

チャシの內、或は石器、貝塚土器を出すものあり、或は石器、貝塚土器と共に鐵器を出すものあり、或は鐵器を出して石器、貝塚土器を出さざるものあり、其一樣ならさる事實は、頗る研究すべき價値あるものとす。想ふにチャシの主人公たりし人種は、最初石器及び貝塚土器を使用し、鐵器其他便利の器物を得るに從ひ之を交へ用ひ、終に鐵器等にて事足るに至り石器及び貝塚土器の使用を廢せしものならん歟。而して其船釘の比較的多く出づるを見れば、當時彼等が如何に鐵を貴重し、又如何に苦心して鐵を得たるかを推察するを得べし。此件に就ては尙ほ十分遺跡、遺物を調査するの必要あるを信す。

チャシの內部、並に其傍に存在する遺物の種類、器物の材料の品質、及び遺物の多少は、其主人公たる人種の生活狀態を知るの、好材料たるのみならず、又チャシ使用の時代、並に住居期間の長短等を判定する好材料たり。

チャシと竪穴との關係

チャシは、悉く竪穴と關係あるものにあらずと雖も、其或るものは、確に竪穴と密接の關係を有せり。即ち陸奥國上北郡蛯澤、及び中志、石狩國雨龍郡深川村納內、日高國三石郡姨布村シュッブ、十勝國中川郡旅來村、釧路國厚岸郡後靜村ウライコタンのチャシの如きは、砦內に竪穴あり。其他チャシの附近に竪穴ありて、兩者の間に密接の關係あることを、想像せしむるもの少しとせず。且つ予の數所に於て實際取調べたる所によれば、チャシ內の遺物も、其附近に在る竪穴の遺物も、同一にして別に差異ありと認めざれば、或る時代、或る地の住民は、竪穴をも作り、チャシをも造りたりと、斷

定するを得へし。

チャシは何人の遺跡か

チャシは何人が何のために造りたるやを、アイヌに問ふに、或は知らずと答ふるあり、或はコロボックルの遺跡なりと答ふるあり、或は神の遺跡なりと云ふものありと雖も、亦アイヌの遺跡なりと斷言する者少なからざるを見れば、之を造りたる主人公其者を推定するに難からず。又陸奥國及び渡島國にあるチャシは、蝦夷館又は狄館等の名稱を有し、而して狄(イヌ)の字は彼の地方にてアイヌに使用したる字にして、明に其アイヌの遺跡たるを示せり。尚ほ舊記類に就て調査するに、寛文九年(西暦1669年)シブチャリ(今の日高國靜内郡)の酋長**シャグシャイン**の亂を記せる數種の書中には、彼等が砦を設けて之に據りたることを記し、又津輕一統志の内**シャグシャイン**亂の時の記事中に、瀨棚、余市、及び石狩の奥にアイヌの大將の居城あること等を記せり、降て天明元年(西暦1781年)**松前廣長**氏著述の松前志蝦夷風俗の部に下の如く云へり。

> 夷方にて不義をなし、或は罪あるものには、寶物を出さするを法とす、是をツクナイと云ふ。法に背きて財を出さざれは、鬪爭に及ぶ、其時は毒箭を放ち、鎗を横たへ戰をなすなり。故に大邑の酋豪たるものは、必す一廓の高山を、チャシと名つけて、此に據るなり。

天明四年(西暦1784年)**立松東作**氏著述の東遊紀に曰く、

> 名は忘れたれども、東蝦夷に大なるチャシを持てる者あり、四方險阻にして、藤つなにすがりて出入す(中略)、チャシとは蝦夷の居所城壘の如きものを云ふ。

渡島筆記(著述年代不詳)に曰く、

> チャシと云ふは、城のことにて、要害によりて作り、櫓をかきあげ、中より毒矢を射出す。

其他チャシがアイヌの砦なることは、二三の書籍に散見すれども、最も價値あるは、安政五年(西暦1858年)**松浦竹四郎**氏の東蝦夷日誌の一節にして、釧路國釧路町附近にあるチャシの來歷に付き下の如く記せり。

久摺會所の後にチャシコツあり、此城には、オニトムシと云へるもの住せし由、今素燒の陶器、又鏃石、雷斧石等を堀出すことありと(中略)、ハルトル、又爰に城跡あり、其故を乙名なるメンカクシに審すに、我等が先祖なるよしにて、左の如く答ふ。

初代オニトムシ、此者天より下り、土人の娘を妻として、上なる城に住せしと。オニシは雲、トムシはトウシにて下ると云ふ義にてあり。其妻の名は知らざるよし。其子、トミカラアイノ、此者ハルトルの城を築き居住せしが、根室、厚岸、十勝三方より攻來り落城に及び、後サルシナイに城を築き居りし時、また攻來りしが、前の谷地を堀となして防ぎ勝利を得、城を子に譲り、ニシベツの方に行き住せしと、名義金身と云ふ義なりと。トミチャアイノ、此者弟あり、シラリウトルの上に城を築き、舍利、根室の兵と戰ひ勝しと、名義金を割し如く角立あると云ふ義なりと。タサニセ(トミカラアイノの悴)、此者サルシナイの城にて諸方の敵を防ぎしと、名義雲の合ふと云ふ義なり。ヘケレニセ(同弟なり)、此者今のヌサウシの城に居りしと。

此の如く連綿數代、今の脇乙名メンカクシ家の先祖の居所なりしと話しければ、爰に記し置くこと然り。

以上の内、松前志に高山と云ふが如き、東遊記に藤綱にすがりて出入すと云ふが如きは、如何かと思はるれども、是れ著者が實際視たるにあらずして、聞きし儘を書きたるによるものなれば、敢て咎むるに足らず。兎に角此等の書中に記する所を概括すれば、チャシはアイヌの城砦にして、其據守の爲めに造りたるものたるは、復た毫も疑ひを容れざるなり。然れども當時戰爭あればとて、獨立せる各部落、必しも皆チャシを構へたりと云ふにあらず、甲部落にはチャシありしも、乙部落にはチャシなきこともありしならん。膽振國虻田のアイヌ**明石和歌助**が、予に語りたる口碑の中に曰く、古昔虻田アイヌと余市アイヌと戰爭したる事ありしが、其時余市にはチャシありしも、虻田にはチャシなかりき云々と、亦以て一證とすべし。

チャシ使用の年代

アイヌが數多の部落に分れ、各々獨立して諸處に散在し、平素は互に交際せるも、時としては平和破れ、互に劇しく戰爭したるこ

とあるは、彼等の口碑等によりて略ぼ之を知るを得べし、又松前藩の記錄によれば、藩祖武田信廣以來、アイヌと和人との戰爭、及びアイヌ間相互の戰爭は、十餘回ありたり。而して遺跡、遺物調査の結果によれば、チャシには或は酋長、若くは酋長の外身分ある一部の者まで、長く住居したるものもありしならん、或は爭亂の際のみ一時立籠りたるものもありしならん。チャシ創始の年代は、今之を詳にする能はずと雖も、使用の終期は略ぼ之を知るを得べし。即ち今より百二十餘年前、天明の頃迄は間々チャシに據り居たる者ありしは、松前志、東遊記に記する所にて明かなり。蓋しアイヌの爭亂は、寛政元年(西暦1789年)國後アイヌの亂を、終りとするが故に、寛政年間を以てチャシ使用の終りとなすは、蓋し適當なる推定なるべき歟。

コロポックル說の誤謬

アイヌの口碑によれば、往古此地にコロボックルと稱する矮小人種あり。竪穴は勿論、遺跡より出つる石器、貝塚土器の類は、皆此人種の使用したるものにて、アイヌの使用したるものに非ずと稱し、甚だしきはチャシをもコロボックルの遺跡なりと云ふものあり。但北千島アイヌ(今の色丹土人)には此口碑なし。而して坪井博士の如きは、此口碑を殆ど全然信用し、多年之を唱道し、其說大に世に廣まりたり。然れどもアイヌ以前に、此地に他の人種が居住せしや否やは、別問題として之を措き、竪穴、石器、貝塚土器を指して皆他の人種の遺物なり、アイヌの使用したるものに非ずと云ふは、慥に誤謬たるを免れず。其證は種々あれども、茲には之を略し、單にチャシ研究の結果より之を言はん。

チャシがアイヌの使用したるものなることは、前に記るす所により既に明瞭にして坪井博士と雖も、恐くは之に反對すること能はざるべし。然らばチャシ內の遺物たる石器、及び貝塚土器の類は、之をアイヌの使用したるものなりと云ふも、亦恐らくは反駁する

の辭なかるべし。又チャシと密接の關係を有する或る竪穴も、之をアイヌの使用したるものなりと云ふも、亦恐らくは之を否定すること能はざるべし。想ふに坪井博士は、アイヌの口碑に重きを置き、遺跡遺物の調査を疎かにしたるが爲め、誤謬に陷りたるにあらざる歟。夫れ未開人の口碑には誤謬ありて信し難きこと少なからず。矮小人種に關する口碑の如きは、他の未開人間にも間々傳ふふる所にして、之を口碑と云はんよりも、寧ろ未開人の小說と云ふを適當とすべし。殊にアイヌは、自己の知らざる遺跡、遺物を見れば、濫りに之をコロボックルに歸するの惡癖あり。聞く人注意せざる可らず。

CHASHI OR FORTRESSES OF THE AINU.

(RÉSUMÉ.)

BY T. KŌNO.

(With Plate II.)

1. **Definition of Chashi.** *Chashi* is an Ainu word applied to a fortress enclosed either by an open ditch or earth embankment, or protected by steep slopes. It is at present generally known by the name of *Chashikot* which means the site of a fortress, or the place where a fortress was.

2. **Distribution of Chashi.** *Chashi* are distributed throughout the main island of Hokkaidō or Yezo, where more than ninety remains in different localities have already been recorded. They are also found in the northern provinces of Honshū and in the Kurile Islands.

3. **Position and Size of Chashi.** A *Chashi* is generally built on the top of a hill, or on the projecting point of a terrace near the sea, lake or river. Generally they are located in such places where they can easily procure food and water, and can command a wide view of the surrounding country. Their height is from 20 to 80 feet, but seldom reaches to more than 200 feet. Their circumference is from 120 to 600 feet. *Chashi* of smaller size are more abundant than the larger ones.

4. **Shape and Construction of Chashi.** The shape of *Chashi* is mostly irregularly oval or circular in outline, or rarely irregularly square or triangular. A *Chashi* situated on the projecting portion of a terrace is generally separated from the rest of the elevated land by an open ditch, the remaining side being left in its natural slope, or encircling steps formed on the declivity. That which is built on the top of a hill, has generally an open ditch dug round its base, or has its slope made very steep.

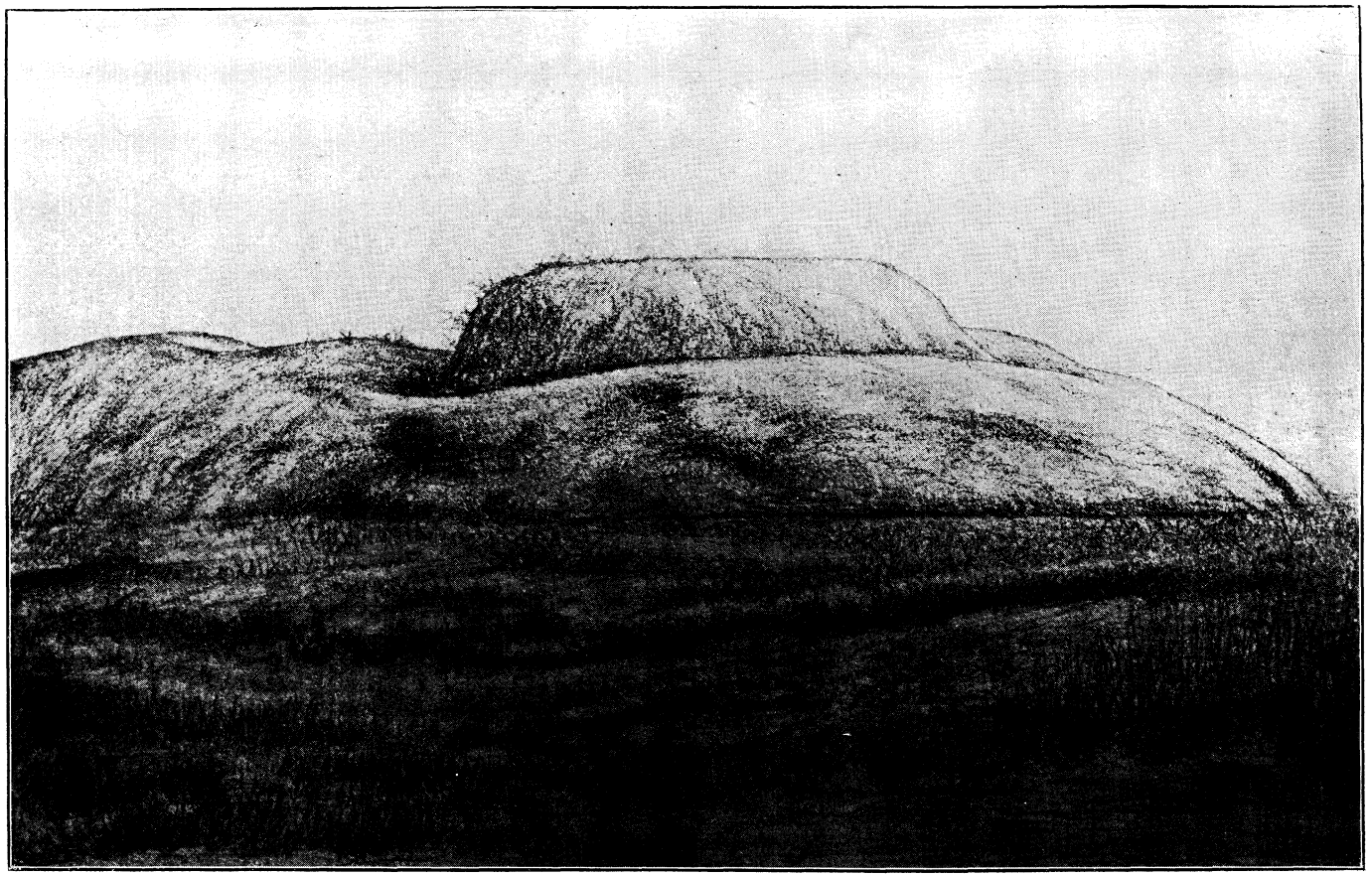
5. **Remains in the Inside of Chashi.** Remains dug out from within the enclosure of *Chashi* vary a great deal in different localities. In some places, fragments of pottery and stone implements, such as stone-axes and arrow-heads are found; in others besides these remains, iron implements are also found; while in others only iron implements are dug out. All these remains are quite similar in character to those found in pits near by.

6. **Relation between Chashi and Pits.** Pits may be found either within or outside the enclosure of *Chashi*, or sometimes they may be entirely absent from the vicinity of a *Chashi*. From these facts, we may safely infer that some people in some period built both *Chashi* and pits together at the same place.

7. **By whom were Chashi built?** According to old Japanese literature relating to the subject, *Chashi* were built by the Ainu. Moreover, in the traditions of this people, it is transmitted that their ancestors built these *Chashi* in time of war.

8. **Date of the Making of Chashi.** Although we can not tell when *Chashi* first began to be built, yet we know the latest period of their use to be about one hundred years ago, *i. e.* at the end of the eighteenth century.

9. **Erroneous Views concerning the Koropokguru.** According to the traditions of the Ainu, there lived in Yezo a dwarf race called the *Koropokguru*; and pits, stone-implements, shell mounds, and pottery are all the relics of this people. But there are many strong proofs against the veracity of this tradition. Even from the studies of *Chashi* alone, it is evident that the Ainu used at first stone implements and pottery, and abandoned their use at the introduction of iron implements; and that the Ainu lived in pits at some period.



Chashi or Fortress at Moshiriya, Kushiro.

釧路國釧路町字モシリヤのチヤシ